

芦生からの便り 第3回



想定外の仕事 その2 (遭難事故の続き)

こんにちは！芦生研究林です。

「遭難騒ぎ」は前回で終わりにしておこうかと思ったのですが、今回もその続きになってしまいました。悪しからず。

…というのは、この秋にも2つ、遭難事故があったからです。

1つ目は、一人で入山したものの、道に迷って動けなくなり、救助された男性。この男性の救助のために、芦生研究林の職員は、日曜・月曜の二日間、延べ12人が、14時間半にわたり、捜索に参加。(教職員情報11月号新聞記事参照)



▲ 構内入口付近に設置されている入林者カード入れ

そして1週間がたった土曜日の夜9時、私の自宅の電話が鳴りました。芦生の事務所からです。電話の主は、掛長。

「夜分すいませんが、遭難です！」

春と秋のこの時間に芦生からかかってくる電話は、遭難事故と相場が決まっていますから、受話器を取る前から覚悟はしていましたが、立て続けに起こるとは。職員の体の事ももちろんですが、精神面も気になります。

それに、明日は映画の撮影隊が芦生に入る事になっています。芦生の自然に負担にならないように、事前に相手側と交渉を積み重ねてきた結果の撮影の日です。その撮影隊が道に迷わないよう、また、こちらが出した条件を遵守してくれるよう、職員を何人か出す予定になっています。明日は、そちらでも職員をとられるのです。

電話では、今、南丹市の警察が、明日の打ち合わせに芦生事務所へ向かっているとの事。

私は、夕食の時、ビールを飲んでしまったので、行く事は出来ません。打ち合わせは、事務所に来ている職員と警察に任せました。(いつもの事ではありますが…)

夜11時、再び電話が。

「明日の朝7時から 捜索を行うことになりました。撮影隊に付き添う職員も確保しなければならないので、人員が足りません。7時までに、芦生に来てください。」

翌日曜日、朝4時半に自宅を出発しました。遭難者は、4人グループの1人の77才の男性。はぐれたから、帰って来た、と3人の話。その3人も、昨晩は芦生に泊め、調査に入っていた先生のグループが、夕食を作って食べさせました。

7時から、捜索隊が山に入りました。

山だから無線が使えるだろう、というのは間違いです。この日も、撮影隊との両方で、まず山の入り口に1人。そして峠に1人。そして現場にようやく無線が届く、というのが現状。山の中では、無線も人力で繋いでいくしかないのです。そうして始まった捜索でしたが、8時過ぎ、事務所の電話番をしていた私に、無線が入ってきました。

「夜明けを待って、遭難者は、自力で広河原に下りて行き、無事」との事。

…安堵しました…。



けれど、これで全て終了、という訳にはいきません。報告書の作成が待っています。それに、まず、何とんでも「4人に対するお説教」が先です！前日、3人が「1人がはぐれた」と言って来た時、2人の職員が暗くなるまで、探しに山に入りました。

彼らは、家が近いから呼び出されたのでしょう。2週続けて、休日に。家族で、芦生の宿舎から遠出をしていた職員も、電話で呼び戻されました。で、その理由が「はぐれたから、置いてきた」では、職員が怒るのも無理ありません。

再度、これを読んでくださっている皆様に、お願いします。どうぞ、くれぐれも無理・無茶な計画では、山にお入りにならないでください。今年も、もう芦生は、死亡事故も含めて4件目なのです…。

(文：芝 正己)

◀ 入山式の様子



著者プロフィール

芝 正己(しば まさみ)

京都大学フィールド科学教育研究センター(森林環境情報学研究分野 准教授)所属。

京都大学および宮崎大学・三重大学を経て1997年10月より現在に至る。

専門は、森林利用学、森林管理・情報学。

これまでの主な研究テーマは、

- ① 森林の経営基盤整備計画・評価法に関する研究、
- ② 持続可能な森林管理と森林認証制度に関する研究、
- ③ 森林の資源利用と保全計画に関する研究。